
ACUTE ~ 悲劇 ~

偽りの仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ACUTE（悲劇）

【Nコード】

N3135BA

【作者名】

偽りの仮面

【あらすじ】

歌にあるACUTEをストーリーにしてみました！
この物語のキャラは、自分のイメージによる物です！
それでも良ければどうぞ・・・！

彼女達の悲劇の運命が今・・・回り始めた・・・

プロローグ（前書き）

どうもみなさん！おはようございます！こんにちは！こんばんは！
偽りの仮面です！

勝手ながら歌であるACUTEを自分流に物語を作ってみました！
読んでくれたら幸いです！

プロローグ

初音ミク

緑色の髪をした16歳の少女。ネギ類が大好き

巡音ルカ

ピンク色の髪をした20歳の女性。桜餅が大好き

カイト

青色の髪をした男性。アイスクリームが大好き

第三者 side

ドス

冷たく湿った部屋にその音は響いた

そこには、三人の男女がおり・・・緑色の髪の子が青い髪の男性をナイフで腹部を刺していた

男性からは、血が滴り落ちていた

そして・・・その男性は倒れた

後はもう・・・沈黙だけだった

その時・・・緑色の髪をした少女は男性を刺したナイフを首にやり・・・

ピンク色の髪の女性に

「・・・さよなら・・・」

と言い、自分の首をナイフで切った・・・
なぜ、このような悲劇が起きたのだろうか・・・
それは、一週間前にさかのぼる

ミク side

ミク・・・部屋で就寝中

「ふあゝあ」

あくびをしてミクは起き上がる

うゝん・・・眠たい

もう一度寝ようかな・・・？

ミクは枕に頭を置き寝ようとした時、チラッと見えた目覚まし時計にびっくりした

「あつ！今日は、カイト君とルカさんと一緒に遊園地に遊びに行くんだー！」

ミクは、ベットから飛び起き急いで準備をして集合場所に行った
そこには、綺麗な黒のスカートを着たルカさんとかっこいいタキシード？みたいな服を着たカイト君がいた

「カイトくん！！ルカさん！！」

ミクは、大きな声で言った

カイト君とルカさんは、体をピクツと動かして振り向いた

「ごめん！！待った？」

カイト君は笑って言った

「ううん、今来たところだよ」

うわーん！うれしいよー！カイト君優しいー！

その時、ルカさんがちよつと顔をしかめて言った

「遅いですよ。本当はものすごく待ってたんですから」

うーん・・・そんなに言わなくても・・・

シヨボーンとしてるミクやちよつと顔をしかめてるルカさんをカイト君は「まあま」と必死になだめた

「じゃ・・・じゃあ、行こっか！」

カイト君は、ちよつと動揺しながらもミクとルカさんの手を握り遊園地に行った

こうして・・・悲劇への齒車は廻り始めた
彼女達は、未来・・・どうなることかも知らずに・・・

プロローグ（後書き）

どうでしたか・・・？

おもしろく読めたなら幸いです！

楽しい遊園地

ミク side

みんな〜！今、ミク達はジェットコースターに乗ってるよ！！
楽しみ〜！

横を見るとカイト君がブルブル震えていた

「カイト君大丈夫？」

カイト君は、顔が引きつりながら笑顔で言った

「だ・・・大丈夫だよ」

「ふう〜ん」

奥には、ルカさんが座っていて冷静な感じだった

そして・・・店員さんが「いってらっしゃい！」と笑顔で言った瞬間、出発した

数分が経った後、無事終わりミクは軽い足取りで降りた

「はあ〜！楽しかった！！ねえ！ルカさんやカイト君も楽しかった

よね？」

ルカさんは、出発する前の表情でジェットコースターから降りて言った

「そうですね、まあこんなものでしょ」

はは・・・相変わらず笑顔を見せない・・・

「カイト君は？」

ミクは、カイト君の顔を見てびっくりした

カイト君の表情はもう死にそうみたいな表情だったから

「だ・・・大丈夫カイト君!!」

カイト君は、おぼつかない足取りでジェットコースターを降りて言った

「だ・・・大丈夫だよ」

えゝ・・・大丈夫じゃないでしょ・・・

まあ・・・そんなこんなで次は、お化け屋敷！と思っただけど・・・

・カイト君はやっぱりもうだめみたいでベンチでダウンした
何でこうなるのー！ー！！

本当は、もっとカイト君と親密になりたかったんだけどなゝ

まあ、仕方ない！ルカさんと2人で行くか！！

「ルカさん！ミク達で、他のアトラクション乗ろうよ」

ルカさんは、何一つ表情を変えないでこう言った

「別に・・・構いませんが・・・」

「よし！レッツゴー！！」

そして、ミク達は色々なアトラクションに乗った

そして、もうお昼になってお腹が空いてきた

ミク達は、カイト君の方に行った

カイト君は、復活していた

「カイト君！もう大丈夫なの？」

カイト君は、いつも通りの笑顔を見せこう言った

「うん！もう大丈夫だよ！」

「そっか〜！良かった〜！」

その時、グウ〜とミクのお腹がなる音が聞こえた
ミクは、急に顔が熱くなるのを感じた
その時、カイト君が笑顔で言った

「じゃあ、お昼ご飯食べようか！」

「うん！」

こうして、楽しい時間が過ぎていった
カイト君はいきなりある提案してきた

「思い出に写真を撮ってもらおうよ」

「写真？」

「そう、三人の思い出の場所として」

「思い出の場所かあーうん！いいね！撮ろ撮ろ！ルカさんは、どう？」

「私は、良いですよ」

「やったー！」

「決まりだね、じゃあ、写真を撮ってもらえるように頼みに行ってくるよ」

カイト君はそう言うと近くにいたカメラマンさんに写真を撮ってもらえるように言った

カメラマンさんは快く引き受けてくれた

「じゃあ、私が合図したら撮りますのでよろしくお願いします！」

「では、1+1=・・・」

「一一いー」

これを三回くらい繰り返した

「はい！オツケーです！」

そして、カメラマンさんはそう言つとミク達に写真を渡した
きれいに撮れてた！やったー！

「ありがとうカイト君！大切にするね！」

「うん！良かったよ！」

そして、夕方になった

「はあー！楽しかった！ありがとねカイト君！遊園地に誘ってもら
つて！」

カイト君は、微笑んで言った

「ううん、こっちもありがと・・・楽しかったよ」

わーい！

カイト君が、楽しかったって！

うれしーい！！

ミクが嬉しがっている中カイト君は、ルカさんの方を向いてこう言
った

「ルカもありがとう」

珍しく、ルカさんの頬がピンクに染まった

その時、ミクの心のどこかで何か締め付けられるような感覚に襲われた

何だろう？この気持ち・・・なんて言うか・・・カイト君が取られていくような感じが

いえ・・・これは気のせい！気のせい！

そして、みんなは解散してそれぞれの家に帰った

ミクは、帰ってる途中、呟いた

「まだ・・・残ってる・・・あの・・・気持ち」

第三者 side

運命は廻り始めた

歯車のように

ゆっくりと・・・

運命の日まであと

6日

楽しい遊園地（後書き）

誤字脱字等ありますが、暖かい目で見てやってください

遊びに行った！（前書き）

すみません！少し短めです！

遊びに行った！

ミク side

小鳥の鳴き声でミクは、目覚めた

「うーん・・・朝か・・・」

そう呟くとミクは起き上がり、顔を洗い、歯を磨き、服に着替えて、朝食のトーストを食べた

今日の予定は・・・なし。でも！予定がないなら作ればいい！ということで、カイト君の家にゴー！！

ミクは、靴を履きドアを開けてカイト君の家に行った。ミクは何度もカイト君の家に行ってるから道を知っていた。そして、家についてインターホンを鳴らした

ピンポーン ピンポーン

「はい」

とカイト君の声が聞こえた

ガチャッ

とカイト君がドアを開けた
そして、ミクを見ると笑顔でこう言った

「どうしたの？ミク」

ミクは、笑いながら言った

「実は、今日暇だったから遊びに来たの！・・・ダメ・・・かな？」

「そんなことないよ、遊ぼう」

カイト君は、変わらず笑顔をミクに見せて言った

「やったー！」

ミクは、喜びながらカイト君の家に入った
その時、カイト君が言った

「ちょうどルカも来てるから」

ドクン

また、胸を締め付けられるような感覚がまたミクを襲った
く・・・苦しい・・・

その時、カイト君が心配そうな表情でミクを見て言った

「大丈夫？顔色が悪いけど・・・」

「だ・・・大丈夫」

ミクは、笑って見せた

カイト君は安心したような表情で言った

「そうか・・・良かった」

その言葉を聞いた時、胸を締め付けるような感覚は消えた
不思議だった・・・何なの・・・これ・・・？

そんなことを、考えてるとカイト君の部屋に到着した

カイト君は、ドアを開けてくれた

目の前にはルカさんがイスに座っていた

ドクン

また、胸を締め付けるような感覚に襲われた

しかしミクは、それを必死に抑えていつものように笑顔でこう言った

「あれ？何でルカさんがここにいますか？」

ルカさんもいつもと表情を変わず言った

「はい、実は以前ここで遊んだときに忘れ物をしてしまいました取りに来たのです」

「ふうん、そうなんだ！」

その時、カイト君が入ってきてこう言った

「じゃあ、みんなでトランプでもする?」

「そうだね!」

そう言っでミク達は、トランプをした

最初は、ババ抜き!

でも、やってる途中にミクの手札のクローバーのエースを見た途端に何かどつかで見た覚えがあるような感じが・・・まあ、いいや!そして、ババ抜きが終わり、カイト君はトイレに行った

カイト君がトイレに行ってる間に、ミクはルカさんにずーと気になっでいたことを質問した

「ねえ、ルカさん」

「何ですか?」

「カイト君の事・・・好きでしょ？」

遊びに行った！（後書き）

一つ皆さんが疑問に思う所がありましたね！

そうです！

ミクが、どこかで見たことがあると言ったあのクローバーは、人柱アリスで出てきたミクの手の甲に付いてたクローバーのマークです！
ちよっとした、小ネタです！

これで、楽しんでもらえると幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3135ba/>

A C U T E ~ 悲劇 ~

2012年1月10日22時49分発行